

目次

『平家物語』鑑賞の手引き……………	1
古典は問題を提起する……………	1
散文の古典の代表作『平家物語』……………	3
物語の《とき》への着眼……………	5
①完了した視点で書かれていること…5／②	
物語の伏線とその脈絡に留意せよ…8／③暗	
示と予兆について…10	
物語の《ところ》への着眼……………	12
①その視点を見きわめよ…13／②シチュエー	
ションに留意せよ…16／③場面転換の巧みさ	
…18	
物語の《ひと》への着眼……………	22

①群像形象のおもしろさ：23／②作中の会話
に心をとめること：25／③沈黙の《間》に気
をつけよ：29

源氏再興の夢——「源氏揃」……………35

不遇の皇子以仁王：37／老将・源三位頼政：
40／頼政、深夜高倉の宮を訪う：42／『吾妻
鏡』の記事：44／頼政拳兵の真相：45／名寄
せという形式：48／源氏一族の展開：51／諸
国に散在する源氏一族：54／拳兵への説得：
61／相大納言の予言：64／令旨、諸国の源氏
へ：68／高倉宮の令旨の内容：69／謀反発覚
……………72

月下の乱闘——「信連合戦」……………75

劇的な幕開き：77／長兵衛尉信連という侍：
79／女装の逃避行：81／秘蔵の笛・小枝：
85／笛をめぐる脈絡：88／信連の装束：90／

装束描写の着眼点：91／長兵衛尉長谷部信連
が候ぞ：93／信連の奮戦：97／信連捕らわる
……………99／この段のみどころ：100／信連の弁明：
102／侍品の者：104／信連の武勇譚：106／信連
のその後：109／信連後日譚の異説：110／ドラ
マチックな場面構成：111

物語の舞台 高倉の宮御所：114

馬とつわもの——「競」……………117

今三日が中の御嘆き：117／頼政謀反の動機：
120／名馬木の下：121／馬をめぐる逸話：125／
名馬は武士の宝：126／金焼きのはずかしめ：
129／宗盛の思いあがり：131／小松殿のふるま
い：134／賢兄重盛と愚弟宗盛：138／頼政一族
の三井寺入り：142／とり残された競：143／宗
盛と競：146／競の報復：149／競の装束描写：
150／競、三井寺へ：154／媛廷の尾髪は生えず
……………156／主従のきずな：158／五十嵐力博士の指

摘：158／オムニバスの手法：160

物語の舞台 滝口の陣と弓場殿：162

奇襲ならず——「大衆揃」……………165

六波羅夜襲の軍議：166／一如坊真海の長広舌
 ……171／乗円坊慶秀の反駁：172／軍議のモチー
 フ：175／夜襲部隊の名寄せ：177／大手のつわ
 ものたち：179／平等院と北の院の僧徒たち：
 181／房人・堂衆・中間法師ばら：184／渡辺覚
 の武士たち：187／孟嘗君の故事：190／一如房
 焼打ちされる：193／名笛・蟬折のこと：194／
 蟬折の銘の由来：196／二つの世をつなぐ笛：
 198／乗円房との決別：200／山内須藤の一族・
 刑部房俊秀：202

物語の舞台 三井寺：204

軍場こそ晴れ——「橋合戦」……………208

宮の落馬：210／橋板、三間引きはづし：213／

平家勢の追撃：216／橋上合戦譚の原拠：219／
 川を隔てての矢いくさ：222／頼政と仲綱の装
 束：223／わざと甲は着給はず：225／五智院の
 但馬の奮戦：226／功名譚とあだ名：227／浄妙
 房明秀の登場：232／黒づくめのひた黒装束：
 235／荒法師明秀の名のり：238／籠に一つぞ残
 ったる：239／一条・二条の大路とこそ振舞う
 たれ：243／明秀の奮戦ぶり：244／いくさ語り
 のリズム：246／一来法師の救援：247／芸能化
 された一来法師：250／戦場から去る浄妙房：
 252／上総守忠清の提議：254／若武者足利又太
 郎の揚言：260／実例としてのいくさ語り：
 262／馬筏による渡河法：264／いくさ語りの口
 吻：266／忠綱麾下の東国軍団：272／馬筏によ
 る強行渡河：273／ゆきとどいた下知：276／三
 段仕立ての構成：280

物語の舞台 宇治：282

宮方の壊滅——「宮の御最期」……………286

- 足利又太郎の装束：287／名のりの意味するもの：291／足利氏のその後：294／流される軍兵たち：295／宮方の防戦：297／源大夫判官の最期：299／伊豆守仲綱と下河辺藤三郎：302／六条藏人仲家父子の悲劇：304／埋木の遺詠：306／其の時に歌詠むべうはなかりしかども：308／頼政最期についての異説：310／渡辺競と円満院源覚の奮戦：312／古つわもの飛驒守景家：314／高倉の宮の最期：315／六条亮大夫宗信の目撃談：318／高倉の宮最期譚・異聞：321／間に合わなかった南都勢：323

物語の舞台 光明山の鳥居と贊野の池：324

弓矢のほまれ——「鶴」……………328

- 詠歌による昇殿：329／「人知れぬ大内山の山守は」の歌：332／三位叙任のいきさつ：334／

- 「上るべき便り無き身は」の歌：336／頼政の歌才：337／近衛院の御代の怪異譚：341／八幡太郎義家の鳴弦：343／頼政への下命：345／頼政、変化のものを射る：350／怪物の正体：353／頼政、御剣を賜わる：356／ヌエ塚の伝承：358／応保の化鳥事件：360／頼政再度の功名：361／頼政が拝領した所領：366／二つの妖怪退治譚：368／菖蒲の前をめぐるエピソード：370

掲載資料一覧

- 口絵 月百姿—高倉の月（月岡芳年画（著者所蔵））
高倉の宮以仁王・以仁王系図：38／源頼政邸と頼政東山堂：41／源三位頼政像：42／頼政詣高倉宮図：46／源氏略系図：52／源氏一族の分布：56／高倉の宮をとり巻く人びと：65／以仁王に挙兵をすめる頼政：68／熊野別当家系譜：74／市女笠をつけた女性：82／腹巻・衛府の太刀：91／高倉の宮関係系図：94／長谷部信連：98／長谷部神社・信連塚：108／高倉宮御所跡：114／高倉宮御所周辺図：115／調馬図：122／指貫：134／還城楽：136／宗盛と重盛：139／滝口の陣：143／星甲・いたつき・持楯：152／弓場殿における射礼：162／京

都近郊地図：168／刀を前垂に差す・打刀：173／六波羅夜討ちの軍勢
 編成表：179／渡辺党系図・山内首藤氏系図：186／乱抗と逆茂木・搦
 楯：189／武装した僧兵：192／カンチク：194／弥勒来迎図：197／鳩杖
 ：200／三井寺山門：204／『園城寺境内古図』・中院：205／宇治周辺
 図：212／宇治橋の構造推定図：213／宇治橋周辺：214／平氏・伊藤氏
 系図：217／大分君稚臣の奮戦：220／科皮威：224／五智院の但馬：
 226／宇治橋合戦図：228／筒井浄妙房明秀：232／浄妙像・浄明塚：
 233／五枚甲・黒漆の太刀：236／箆に矢一つのこす：240／貫：243／加
 久繩・かくのあわ：244／目貫・腰刀：245／一来法師の奮戦：248／祇
 園祭の浄妙山：250／宇治橋合戦図：256／宇治橋合戦図：258／故我・
 杉の渡し地図：263／馬筏の組み方：266／足利氏系図（1）：268／足
 利氏系図（2）：269／足利一門と郎等：270／甲の天辺の穴・かねに
 渡す：274／足利又太郎宇治川渡河の図：277／宇治橋断碑：282／宇治
 橋周辺図：285／高角打った甲：288／切斑の矢：289／滋藤の弓・連銭
 葦毛・柏木にみみづく打った鞍：290／網代：296／童：301／下河辺
 庄：303／自害する頼政：307／頼政の墓：311／扇の芝：312／南山城：
 316／高倉神社・以仁王の墓：320／以仁王御陵：324／源頼政像：331／
 頼政系図：333／『源三位頼政集』・頼政自筆清文：337／鳴弦：344／
 鶴：351／とらづくみ：353／頼政鶴退治図：356／歌を返す頼政：358／
 頼政鶴を射る図：364／鶴大明神社：371／菖蒲前の像：372

『平家物語』鑑賞の手引き

古典は問題を提起する

「科学は問題を解決するが、文学は問題を提起する」

これは、ロシアの作家チェホフの言葉だが、劇作家の木下順二（おしたじゅに）さんは、これに「古典」という言葉を加えて、
 「科学の古典は問題を解決するが、文学の古典は問題を提起する」と
 言いなおされている。

たとえば『プリシキピア（自然哲学の数学的原理）』という著書の中で、ニュートンは万有引力の法則を発表
 しているが、そこでは問題は解決され、その答えが示されており、これを読んだ人たちはそれを検証し、さらに
 発展させて行くことになる。そしてそこに《科学の古典》としての意義がある。ところが《文学の古典》
 の場合は、たとえばシェークスピアの『ハムレット』を例にとると、作中でハムレットに刺されてクローディア
 ス王は死に、その妃でハムレットの母のガートルードも死に、さらにハムレット自身も死んで、事件は一応の解
 決を見せ芝居は終わるが、そこでは問題が提起されているだけで、作品自体はそれになにも答えていない。解答
 はすべてこれを観る観客たちにゆだねられていて、彼等が自分で見つけ出さなければならぬのである。

と云ひければ、仲国、

「返事せば門立てられ、鎖かざされなんぞ」

とや思ひけん、是非なく押開おしあけてぞ入りにける。

行つて見ると、いわれたとおりの片折戸の家、そこから聞こえて来る琴の音。まぢがいなく小督殿の爪音だ、と喜び勇んだ仲国が耳を澄ますとゆかしくも《想夫恋》の曲。ところが、感動した仲国が腰の横笛を取り出して「ちっ」と吹き鳴らし、門を叩くと、ぴたつと琴の音が止む。「これは内より仲国が御使いに参りて候。開けさせ給へ」と何度も来意を告げても、家の中は静まりかえってなんの音沙汰もない。いわゆる《沈黙》の時間がひろがる場面だが、人目を避けて嵯峨に隠れ住む小督にとっては、想いもかけぬ深夜の来訪者に思わず身がすくみ、どう対応すべきか去就に迷ったその途惑いがこの沈黙となつたのであろう。ぴたつとやむ琴の音と、そのあとにくる長い沈黙、それが小督の困惑の深さを示しているといつてよい。

やがて小女が出て応対し、仲国は細目に開けたその戸を押し開いて機敏の中に入り、その使命を果たすわけだが、この沈黙の空隙はこの物語のもっとも貴重な一瞬、その行間ぎょうかんに込められた《言葉では表現しにくいおおくのこと》をそこからぜひ読みとつてほしいものである。

なお、仲国の言葉のうち「」で括つた部分は、音声として発せられない心の中のつぶやきともいふべきもの。ここにはそれが多用されているが、心中のつぶやきはその人の思いをよりよく示すものとして重要である。対話の言葉に留意するとともに、こうした心中の言葉にも充分に注意をはらつて読み取つて、作中人物の思いをより身近かなものとするよう心がけるべきであろう。

※

それでは、『平家物語』の原文を実際に読んで、鑑賞してみることにしよう。

源氏再興の夢——「源氏揃」

治承四年（一一八〇）の四月、都では高倉天皇に代わつて、わずか三歳になつたばかりの皇子言仁親王が帝位につき、盛大な即位の儀がおこなわれた。安徳天皇である。清盛の娘である中宮徳子（のちの建礼門院）とのあいだの皇子で、清盛にとっては外孫に当たり、これにより平家は皇室の外戚としての地位を獲得することになる。だから、平家一門の人びとの喜びは、想像を絶するものであった。

しかし、四年前に起こつた後白河法皇とその近臣たちによる平家打倒の陰謀、いわゆる〈鹿の谷事件〉の衝撃の余波は大きく、このころから平家の盛運にはしだいに影が射し、その前途に暗雲がひろがり始めることにな

る。陰謀事件の決着がついた安元三年（一一七七）の八月に、年号が治承と改められたが、その翌々年の秋、嫡子で内大臣であつた重盛が死に、その遺領のことから清盛はふたたび後白河法皇と衝突、クーデターを起こしてこれに当たつた太政大臣・妙音みよね院師長・関白藤原基房以下の廷臣四十三人を解任し、法皇を鳥羽とばの離宮に幽閉するという暴挙をおこなつた。高倉天皇がまだ二十歳という若さで身を引き、平家の血をつぐ幼い皇子に皇位を譲つたのも、父後白河法皇と舅にあたる清盛との抗争に心を痛めてのことと、そのことがまた人びとの憤懣ふんまんをかき立て、そうした感情がしだいに平家打倒の動きとしてまともに始まりはじめていたのである。

新帝の即位の儀は、安元三年（一一七七）四月の大火で大極殿だいごくでんが焼失してしまつていたため、やむなく紫宸殿